

米村傳治郎さん

[サイエンスプロデューサー]



サイエンスショーを通して、科学のおもしろさを伝える米村さん。その手にかかる、難しい科学の理論も、身近で楽しい遊びに様変わりする。見る人すべてを魅了するユニークなアイデアはどのようにして生まれてくるのだろうか。

いいアイデアは机の上では生まれない

サイエンスショーで扱う実験は、身近にある材料ででき、驚き・不思議さ・インパクトがあって、大きく見せられるものが理想です。みんなが喜んでくれるアイデアを考え出すのは至難の業。常にいろいろなネタを考えてはいますが、結局、考えているだけでは先には進まない。試行錯誤が大切なんです。シャボン玉が割れずに固まる実験があるのですが、それもたまたま濃い砂糖水を使ってみたら固まったから。おもしろいアイデアに行き着くには、トライ、行き詰まったらまたトライ、そのくり返しなんです。

自分で遊び道具をつくる

子どものころは里山で育ちました。薪や山菜を取りに行き植物に興味を持ったり、田舎の真っ暗な夜空を見て星に興味を持ったり。遊びを通して、自然体験をしたんです。おもちゃとかキットなどをそのまま与えられなかったから、自分で創作するのも当たり前でした。壊れたハサミからナイフを作ったり、レンズを組み合わせて望遠鏡を作ったりもしました。無いものを、何とか工夫して間に合わせようとする発想力は、このころ身に付いたのかもしれませんが。新しい実験を生み出すのもそんな工夫の延長ですね。

授業にもユーモアを

都立高校で理科の教師を務めましたが、当時は生徒を授業にひきつけようとあれこれ知恵を絞りました。クラス替えした

ばかりで、生徒たちが馴染んでないときなど、教室がシーンと静まりかえっていますよね。だから最初の授業でみんなに手をつながせて感電させるんです。それだけでクラスはもう大騒ぎ。まあ、そういうインパクトはいつまでも持ちませんが取っかかりは重要。で、次なるインパクトが必要になり、今度は自然観察にくり出す。「春を食べよう」と題して、生徒たちにビニール袋を持たせて野草を5種類摘んでくるように言うわけです。その野草を理科室で種類別に分けて名前を確認したら、最後はピーカーで茹でて食べちゃう。味噌や醤油、鰹節なども用意してね。子どもたちの関心をひきつけて授業に取り組みやすくさせるためには、硬い雰囲気や砕いて、遊びの要素やユーモアを取り入れることも大切だと思うんです。ただ僕の場合なかなか継続的な学習指導には結びつけられなかったですね。教師の仕事は、自分自身で適性に疑問を感じていたこともあって、10年で踏ん切りをつけ、サイエンスプロデューサーを始めたわけです。

喜ぶ顔が励み

サイエンスショーは年間100日くらい、もう1000回以上やっています。でも舞台は生もの。毎回会場も変われば、お客さんも変わります。新しい実験を扱うときなど油断すると進行がボロボロになりやすい。ですからサイエンスショーに関していえば、今の目標は、ショーを演劇やミュージカルのようにひとつの作品としてとらえ、完成度を高めることです。

手ごたえを感じるのは、ショーを見てくれた人が楽しかったと心から喜んでくれた時ですね。そんな声を聞くとは何よりうれしく、もっと工夫して満足してもらえようという希望がわいてくるんですよ。

科学で好奇心をくすぐる

科学って役に立つだけでなく楽しめるもの、心を豊かにして幸せな気分させてくれるものだと思うんです。音楽や美術を楽しむように、「歳を重ねても楽しくつき合えるもの」という文化としての科学のあり方を定着させたい。そう願って、この仕事に取り組んでいます。そもそも人間っていくつになっても物事をおもしろがる心を持っている。だから僕は科学で、子どもから大人まで、人の好奇心を刺激し続けたいんです。

米村さんにとっての「オフ」は？

子ども時代の経験のせいか、やはり自然に帰るのが好きです。ここ何年かはフライ・フィッシングに凝っています。自分で毛ばりを作ったりするのが楽しくて。でも本当は釣りでなくても何でもいいんだと思います。自然の中で遊ばせえればね。



▲科学技術館の「科学教室」にて

米村傳治郎(よねむらでんじろう) | プロフィール

1955年生まれ。東京学芸大学大学院理科教育専攻科修了後、自由学園の講師、都立高校の教諭を務め、96年に科学の楽しさを伝える仕事を目指して独立。98年、「米村でんじろうサイエンスプロダクション」を設立。現在はサイエンスプロデューサーとして、科学実験・サイエンスショー・実験教室などの企画・監修・出演にあたる他、テレビ番組・雑誌などで幅広く活躍中。

科学って楽しくて 心を豊かにしてくれるものなんです